

アメリカの大学院紹介1：アリゾナ州立大学

村上達也（テュレーン大学人類学科） アメリカ留学を志す方々へ

松本剛（南イリノイ大学考古学調査センター）

会員の皆様こんにちは、南イリノイ大学の考古学調査センターで調査員をしております、松本剛と申します。この度は代表幹事の坂井先生から、「これから海外で古代アメリカ研究を本格的に志そうとする若い人たちに向けたコラムの執筆をお願いしたい」とのご依頼いただきました。私のこれまでのアメリカでの経験が、若い人たちにとって何かの役に立つなら幸いと思い、快諾いたしました。

さて、留学についてお話しする前に、まずは参考までに私自身のこれまでの経緯を最初にお話ししておこうと思います。

● 一般職を経験した後、専攻を変えての学部編入

私が最初にアメリカに渡ったのは1998年の夏でした。私立外大で英語学を学んだ後、三年間就職してから、南イリノイ大学（SIU）カーボンデイル校の人類学科に学部編入しました。伝統的なFour-Fieldアプローチを取る大学が多いアメリカでは、考古学は人類学の一分野として分類されます。直接大学院に進学するのではなく、学部編入したのは、日本での専攻が言語で、考古学や人類学の専門的な教育を受けたことがなかったからです。

日本での単位（特に教職課程の単位）が認められ、四年次への編入が許されました。残り数単位を修めれば卒業できましたが、SIUの決まりで三つの単位（学士、修士、博士）を連続して取得することができなかったため、学士を修めることなく大学院に進みました。学部で教わった先生方に推薦状を書いていただいたので、入学審査はスムーズでした。

大学院で最初の一年を過ごした直後（2000年）、家庭の事情により休学することになりました。休学期間はトータルで三年に及びました。この三年間に再就職し、さらに結婚と第一子誕生を経て、2003年の秋学期に復学を果たしました。以来、子育てと学業を両立させながら、修士と博士の二つの学位を修め、2015年2月から母校・南イリノイ大学の考古学調査センターにて研究員を務めています。

私のケースで特徴的なのは、以下の五点です：

- (1) 日本での専攻が考古学でも人類学でもないこと
- (2) 大学院ではなく、学部編入からスタートしたこと
- (3) 就職により、さらにスタートが遅れたこと
- (4) アメリカ国籍や永住権を持たずに家族を伴って渡米したこと
- (5) 留学を視野に入れて大学でしっかり英語を学んでいたため、読み書きはもちろん、ネイティブとの会話にもそれほど苦労はなかったこと

● 「急がば回れ」の意味を知る

私は少し前まで、上記の五つ目以外はすべて私のディスアドバンテージだと思っていました。しかし、ある状況においてはディスアドバンテージと思われることも、状況が変わったり、見方を変えることができれば、それは一転してアドバンテージに変わることがあります。

たとえば就職や休学によって私のキャリアは大いに遅れましたが、在職中に身に付けた知識や技術が後に私の身を助けることになりました。大学卒業後の三年間も、休学中の三年間も、ソフト開発会社でコンピューターソフトやハードの基礎を学びました。この時に学んだプログラミングの基礎やインターネットに関する知識がアメリカの大学でアシスタントシップ（※ 学費が免除になる上に給料がもらえる学内の仕事）を得る際にアドバンテージになったのです。私が所属していた人類学科は学生数と仕事数のバランスが悪く、毎学期、仕事にあぶれる学生が続出します。学内で仕事を得られず、学外でアルバイトをしながら食いつないでいる学生や、生活が苦しくていつの間にかドロップアウトしていく学生も少なくありません。学内アシスタントシップは、学生にとって何よりも大事なライフラインなのです。私は回り道をしながら身に付けた知識と技術のおかげで、一度も仕事に困ることはありませんでした。ある時は人類学を教え、ある時はコンピューターラボで働くことができたのです。それは本当に幸運なことだったと思います。

また、私を長いことコンピューターラボで雇ってくれた人は留学生に対する理解がとても深い人で、同程度の知識や技術を持った候補者が二人いたら、迷わず留学生、しかもより生活が苦しい方を選ぶという人でしたので、私が家族連れであることも一転してアドバンテージになりました。さらには、最初に勤めた会社が独自の地理情報システム（GIS）を開発していたこともあり、2000年代に入って若い考古学者たちの習得必須技術となったGISは、私にとって常に身近なものでした。これは、後に私がGISスペシャリストとして指導教授のプロジェクトに参加する際に大きなアドバンテージとなりました。

ですから、私がまず最初に言いたいことは、一時の状況を憂いて本当に大事なことを疎かにしたり、諦めたりするべきではない、ということです。回り道をしなくてはならない状況に追いやられても、決して腐ることなく、目の前にあることに全力を尽くすことが大切だと思います。ひとつの目標に向かって進む過程で目の前に現れるのに、何一つ無駄なことはないと思うからです。

● 基礎作りは日本でするのがお勧め

以上に述べた私のケースは少々特殊かもしれませんが、ですので、ここからは「もう一度やり直すことができたなら、私ならどうするか」という仮定のもとでお話したいと思います。

私はこれまでに何度か、留学を志す学部生から相談を受けたことがあります。「留学したいのですが、どうしたらいいのでしょうか」という漠然としたものが多かったと記憶しています。自らの経験と失敗、様々な後悔を踏まえたうえで私がお勧めするのは、留学前に、まず日本でしっかりと人類学の基礎を学び、研究者としての基盤を作ることです。この基礎とは、専門知識や技術のみならず、研究者間でのネットワーク作りも含まれます。日本にはこうした基礎作りに適した大学が揃っています。そして、できることならこうした大学で大学院に進み、博士前期課程までを終えて（＝修士号を得て）、調査のプロセスをひと通り経験してから、海外の博士課程に進学するのがいいと思います。そして、博士論文研究のための明確な調査プランをあらかじめ用意しておく。そこまでの準備ができていれば、海を渡る頃までには一専門家としての自信も生まれていることでしょう。

アメリカの大学院では、とにかくたくさん論文を読まされ、書かされますから、考古学についてすでにしっかりと学んでいることは大きなアドバンテージになると思います。これによって、余力を考古学以外の（必修となる）言語学や自然人類学などの別の分野の勉強に費やすことができるからです。また、英語で読み書きするということに抵抗を感じなくなるまでに英語力を上げておくことも必要だと思います。

● 研究者としてのキャリアだけでなく、人生全体を考慮した将来設計が必要

留学をしてまで研究を続けるということは、当然その根底には研究者として身を立てるという志があるのだらうと思います。ですが、研究者であることだけが人生ではありません。時間が経てば経つほど、研究以外の事柄が心の中で少しずつ大きな比重を占めるようになります。上に述べたような経済的な理由のみならず、年を重ねるにつれて様々な心配事が蓄積し、結婚や異分野での就職などに安らぎを覚えてドロップアウトしていく学生が少なくありません。私が日本で基礎を作ることをお勧めするのは、それが大きな時間短縮に繋がると思うからです。最短時間で学位を取得し、なるべく早くに就職口を見付ける、それがベストだと思います。日本に基盤があれば、日本での仕事も探しやすいかもかもしれません。

また、留学を考えるとだけでなく、研究生活そのものに身を投じる前に一度、自分の人生というものを経験的な視野でしっかりと考えてみることも大切だと思います。そしてひとたび覚悟を決めたら、あとはただひたすら邁進するだけです。若いころの情熱は宝です。ですからその情熱を燃やし尽くせるベストな選択をしてほしいと思います。

以下の文章は、本学会会報16号（2004年）に投稿したものです。10年以上経ち、詳細については大きな変化がありますが、大まかな流れはそれほど変わっていないので、そのまま掲載することにしました。立場が変わり現在は大学の教員になりましたが、当時の私が「大量」の論文を読まされると発言していることが面白可笑しくもあります。現在は逆に、学生に読ませたい論文の量が多すぎて、削りに削って本当に重要なものを選ぶのに苦心しています。また、当時の私が言うところの「金持ちの私立大学」に現在勤務しており、大学院生は全員学費免除になりますが、こちらにはこちらの苦労があることも実感しています。当然のことですが、どこにいても、やることにそんなに変わりはないのだということでしょう。ちなみに、アリゾナ州立大学の人類学科はその後名称ならびに組織が変わり、「人類進化・社会変化研究院」となり、さらに巨大化・多様化しております。

最近アメリカやメキシコなど海外で学位を取る学生が増えてきています。私は2000年からアリゾナ州立大学人類学科の博士課程に留学していますが、日本にいる学生から進学先について相談を受けることが度々あります。そこで学生が大半を占める本学会の現状を踏まえて、アメリカの大学院の紹介をしたいと思います。タイトルに「1」と付けたのは、他にも留学している方からの投稿を願ってのことです。アメリカの大学院と言っても大学によってかなりの違いがあるので、今回は私の知っている範囲で紹介させていただきます。

まず、日本の大学院と最も異なるものに授業があります。1つの授業はたいてい1週間に2回あります。最大の特徴は大量に論文を読まされることです。1回の授業に本1冊というのは日常茶飯事です。そして一学期に授業を2つか3つとると寝る時間がなくなり、学期が終わる頃には段ボール1箱分の論文のコピーがたまります。授業の内容も読み物についてのレジュメ発表などはなく、とことんディスカッションをします。さらに、学期末にはその授業で学んだことをもとに論文を提出しなければいけません。論文は文献研究でよい場合もありますが、実際に何かを分析しないといけない場合もあります。いずれにせよ、授業での読み物をこなしながら自分のプロジェクトを進めないといけないので、時間的にかなり苦しくなります。しかし、こうして授業でかなり鍛えられるのでかなりの自信になります。

次に博士を取るまでの過程を簡単に説明したいと思います。まず、当然ですが、トピックを決めます。そしてそれに応じて自分の博士論文の審査委員（3人から5人くらい）を選びます。この審査委員の委員長が指導教官に当たります。その後、授業を取り終わった頃から博士の候補になるための資格試験の準備に入ります。この資格試験は大学によって異なりますが、ASUでは1日8時間、2日に渡って軟禁されて審査委員が考えた問題について論文形式で解答します。この資格試験では3つのトピックを選び

ます。一つは自分の専門とする地域と時代、2つ目は理論、3つ目は方法論について選び、その後それぞれのトピックについての文献を集め文献表を作ります。文献の数はだいたい200から400くらいです。この文献表が認められればひたすら読んで試験に挑むわけです。その試験に通った後、今度は博士論文のプロポーザル（調査計画書）を書きます。このプロポーザルが一番の難関です。博士論文の目的、方法、先行研究をまとめ、予想される結論まで書かないといけません。つまり、実際のデータと分析を抜かした博士論文の縮小版を書かなければならないのです。このプロポーザルを書き、審査委員会でディフェンスをして認められて晴れて博士候補になるわけです。プロポーザルを基金や財団に申請して調査資金を集め調査をし、論文を執筆し、博士論文の口頭試問に通れば博士となるわけです。日本と違い、いろいろな手続きがあり時間がかかりますが、こういった通過儀礼を経て一人前の研究者として認められるわけです。

次に財政的な面について一言。確かに留学はお金がかかります。しかしながら、日本で大学院に通うことを考えると、実はアメリカの方が安い場合があります。これは大学によって地域によってかなり違ってくるとは思いますが、たいいていの大学ではティーチング・アシスタント（TA）やリサーチ・アシスタント（RA）というポジションがあります。ASUの場合ですと、TAあるいはRAになると学費が免除になり、週に20時間（ハーフタイム）程働くと家賃を含む生活費を払える程度の給料がもらえます。したがって、学期中は生活に困ることはありません。ただ、大学の財政状況により、TAやRAの数が限られるため競争が激しいですが、裕福な大学に行くとそれほど問題ではないようです。金持ちの私立大学に行くと、学費は全額免除で生活費付きというところがあります。残念ながらASUはかなり貧乏な方に属しますが、アリゾナは物価が安いので何とか生活はできます。問題は夏休みの間で、この間は給料はありませんから、何とかしないとといけません。ほとんどの研究者は夏の間調査を行います。調査に参加して給料を少しもらったところで生活はできません。留学生は学外で働くことは禁止されているので、学内で職を見つけるか、日本に出稼ぎにでるかしかありません。幸いにASUの人類学科には夏の間フィールド・スクール（野外実習）があり、この間にTAとして働くことができます。しかもフル・タイム（週に40時間）で働けるので給料も2倍になります。私は1年目には考古学のフィールドスクールで、2年目以降は民族誌のフィールドスクールでTAをやって生き延びています。この夏休みさえクリアすれば、何とか研究を続けることができます。また私が留学してから知ったことですが、調査のための助成金はいろいろありますが、生活費を対象にした奨学金のほとんどはアメリカ国民が対象なので、私たち留学生は応募する資格がありません。アメリカにも日本学術振興会特別研究員のような制度があるのですが、これも国民が対象です。したがって、留学で成功する秘訣は比較的裕福な大学に行くことだと思います。実際、博士を取るのに何年もかかる学生の多くが財政的な問題によります。

さて、以上アメリカの大学院についてASUを例に紹介してきましたが、最後にASU自体の紹介をしたいと思います。ASUの人類学科には常勤の教員が36人おり、院生は合計200人近くいるかなり大きな学部です。単純計算で考古学はこれらの3分の1ということになります。ASUの考古学はやはり地元のアメリカ南西部の考古学が最も強い分野ですが、それに続いてメソアメリカ、アメリカの他の地域、中東、エジプト、ヨーロッパ、南アフリカなど比較的世界中に散らばっています。メソアメリカについては、最近静かなブームになっているメキシコ北西部、オルメカが栄えたメキシコ湾岸地域、そして古典期で最大の都市テオティワカンで調査を続けている先生方がいます。また、ASUはバイオアーケオロジーを専攻できる数少ない大学の一つです。このプログラムは考古学と形質人類学両方を組み入れたものです（修士しかなく、博士からは考古学か形質人類学のいずれかを選択しないといけません）。付属研究所にルーシーを発見したジョハンソン率いる人類の起源研究所、考古学研究所、埋蔵文化財研究所、そして他の分野と共同の環境研究センターがあります。この環境研究センターでは、長期的な視野にたって考古学、文化人類学、生物学、生態学、地理学、社会学など共同で環境と人間の関係についての調査が進行中です。

以上アメリカの大学院のシステムならびにASUについて簡単に紹介しましたが、日本で進学先が限られている現状を鑑みると、アメリカを含む海外の大学院も一つの選択肢に入れられるのではないのでしょうか。進学先によっては財政的に日本よりかなり恵まれているところもあります。また、日本で留学のための奨学金を申請することもできます（留学後は申請できなくなります）。本稿が進学を考えたみなさんのお役に立てたかどうかは分かりませんが、少しでも多くの方が進学され日本における古代アメリカ研究がさらなる発展を遂げることを祈っています。